

●著者略歴

1930年生れ
富山県魚津市出身
法政大学日本文学専攻修士修了
東京都中野区白鷺 2-29-21

〔著書〕『評伝横山源之助——底辺社会・
文学・労働運動』（1979年創樹社）

明治下層記録文学

0091-0143-4249

1981年4月25日 初版第1刷発行

定 価 2000円

著 者 立花雄一

発 行 所 株式会社 創樹社

電話 東京 815・3311(代) 振替東京 2・154580

東京都文京区湯島 2・2・1 ☎113

本文印刷 松澤印刷

装本印刷 広 陵

製 本 美行製本

1981© Yuichi Tachibana 乱丁・落丁本はお取り替えます。

明治下層記録文学

立花雄一

目 次

序にかえて 7

第一章

底辺ルポルタージュ文学の発生と展開 11

底辺ルポの淵源と二葉亭四迷 13

底辺ルポルタージュと日清戦後文学 24

1 戦前文学としての発祥 24

2 国木田独歩と底辺ルポルタージュ 27

3 田岡嶺雲と底辺ルポルタージュ 37

4 「貧民観」と底辺ルポルタージュ 50

5 社会小説について 58

底辺ルポ作家と明治文学 64

明治後期底辺ルポルタージュ 82

底辺ルポ作家と労働運動 93

第二章

明治底辺ルポルターシュ概観 105

——地方・都市・工場ルポルターシュ

第三章

横山源之助 191

その文学と底辺の思想 193

二葉亭四迷と横山源之助 230

周辺の文学者 252

1 一葉 252

2 魯庵 259

3 尚江 265

5 儀助、武羅夫 275

参考文献一覧 281

あとがき 285

序にかえて

底辺文学の発生は、いつあったか。

文学における、庶民の発見はいつあったか。

明治二、三十年代は、近代文学の発生期である。底辺社会ルポルタージュ文学の発生期である。

このときにある。

したづみのものの、発見が――。

活気のある、底辺のルポルタージュがつぎつぎにうまれている。

産業革命が遂行されるなど。日本の近代の生成がこのときにすすめられていた。そのことにかかわる。社会の最底辺に重層的に露出された矛盾。変革の相をとらえることが要請されていたことによるのだらう。歴史の必然でもあったらう。歴史変革がもつさまざまな局面を、するどく、あるいはたとえ不確かであっても、とらえようとしてすすみでたのは、けっしてそのときの文学者ではなかった。むしろ無名の新聞記者諸氏や投稿家や、あるいは文学異端の青年作家等であった。このことは、底辺文学の発生、

あるいは近代文学成立期の問題をかんがえるうえで、記憶にとどめておいていい問題である。

この時代に生まれた、良質の底辺ルポルタージュには、みおとせぬひとつの特徴がある。既成文学のかたちを意識的に拒絶している。そして既成文学のアンチ・テーゼとして、底辺社会ルポルタージュをさししめしている。するどく対立する、あたらしい描出領域（ヘルポルタージュ）——。それがあらあらしくうまれていく。そういう良質なものをふくめ、底辺ルポルタージュの多くはじゅうぶんに自己目的化されてなかったようだ。そういうことからいえば、やはり明治二、三十年代のルポルタージュは発生の期ルポルタージュ、前期ルポルタージュであつたのであらう。すぐれたルポルタージュは文学に拒絶的であつた。それは代表的底辺ルポルタージュ作家であつた松原岩五郎や、横山源之助やが、二葉亭四迷に師事する場所から出発していながら、文学者としてでなく、一介の底辺ルポルタージュ作家として終始しようとしたことに符節する。横山の場合は、松原以上に一層意欲的に文学を拒絶する方向にうごいていつている。文学と底辺社会ルポルタージュとの断層は決定的となる。一時その断層をどちらの側からも埋めあわせようとする。はげしいやりとりがかわされたけれども……。

明治二十年代から三十年代前半。文学界の支配的な主流は紅露遺囑、いや硯友社文学および後期硯友社文学の末流が背負っている。硯友社流の文学では、文学認識のうえからも、また文学の具体的な方法論のうえからも、ルポルタージュは文学ではなかつた。底辺社会にのめりこんでいくような、破天荒なルポルタージュ的営為。それは文学のしかたなどであるわけがなかつたのだ。ルポルタージュ作家の側にしてみれば、既成文学が社会の現実とじかに渉りあうようなものではなかつたから、既成の文学を意識的に拒絶しなければならぬ方向へまわらざるをえなかつた。ひとつの文学の形式としておおきくそだ

つだけの実質的な内実や芽を、このころのルポルタージュがもちあわせていながら、文学の領域からはついに認知されないところに、みずからをそだててしまう。底辺ルポルタージュはまさにこのとき文学の孤児であった。しかし、一步をすすめていうなら、このころの底辺ルポルタージュ作家が文学を拒否することに意識的であったということは、これからあらねばならぬ文学のあたらしい傾向や質やについて、かれらがするどく意識していたことを裏書きすることにひとしい。そのことがかれらのルポルタージュを、ともあれ、実質のうえで、文学の側へおおくふみこませてくれたのである。それは底辺文学の祖型である。底辺社会にみじくもせまるところから発生した、明治二、三十年代のルポルタージュ群。それは、近代文学の根源なり、文学のなかにある「近代」の意味なりを、問いなおしている。そのころに発生した底辺社会ルポルタージュは、文学をかんぜんに無視したか、あるいは文学に意識的に批判的であったかした。文学に社会的動向がうまれる使喚的踏石になっていることもたしかである。

さらに、そのころがちょうど日本近代の創出期であったという歴史的な関連がある。そのときにはじめて、「ルポルタージュ」があいついでうまれている。その契機はおおくは文学としてではなく、むしろ経世的なものであった。このころのルポルタージュは、ある意味で功利的である。「経世経綸」の意味をぬきにしてはかんがえられない。その意味もまたおもい。ルポルタージュにおける、「経世経綸」とはなんであったか。その意味もみなおされている。

ルポルタージュの発生。底辺文学の発生。奇しくもそれが同胎であった意味はおおきい。明治下層ルポルタージュがそれを同胎になしとげている。

明治下層社会記録——ここに、ルポルタージュと底辺文学の同時誕生がある。近代文学搖籃期とほと

んどおなじときに、その同時誕生の苦があったことはきわめて興味深い。

第一章

底辺ルポルタージュ文学の発生と展開

底辺ルポの淵源と二葉亭四迷

松原岩五郎の『最暗黒の東京』が出版されたのが明治二六（一八九三）年十一月。おなじく松原の社会探訪記録集第二篇『社会百方面』がでたのが明治三〇（一八九七）年五月である。横山源之助の『日本の下層社会』が刊行されたのは明治三二（一八九九）年四月である。横山が島田三郎の主宰する『毎日新聞』（『東京横浜毎日新聞』の後身）に入社して、最初の社会探訪記事『戦争と地方労役者』を『毎日』紙上に掲げたのは、明治二七（一八九四）年一二月である。以来横山はおもに『毎日新聞』を舞台に、独特の底辺社会探訪記事をあいついで世におくることになる。そしてついに明治三二（一八九九）年『日本の下層社会』一卷によって、ほぼ日本の下層全域にわたるルポルタージュ集が完成されるにいたる。そのときをもって、明治底辺社会ルポルタージュの歴史はひとつの到達点にたつたとみられる。

松原岩五郎の『最暗黒の東京』が刊行された明治二六（一八九三）年前後から、横山源之助の『日本の下層社会』が完成される明治三二（一八九九）年までの期間が、明治底辺社会ルポルタージュの最盛期である。それはちょうど日清戦争に突入する直前あたりから、日清戦をへて戦後の昂揚をむかえる時

期にあたる。明治維新以来の資本の原始的蓄積がようやく煮つまる時期とかさなる。また日本の産業革命が完遂される前後、「社会問題」が急速に「労働問題」に転化されていく時期にあたる。維新後の国内社会矛盾がようやくあらわに恒常化され、むきだしにされたときといえる。対外戦争を準備し、完遂し、それを梃子にし、資本主義体制が急速に形成されようとしていたところに、あいついでルポルタージュがうまれてこなければならなかった素地がある。つまり社会変革がはげしくおこなわれていたところに、その素地があったのだといえる。その社会変革のおもひやひずみを、底辺社会ルポは濃度のいかにかわらずうつしとっている。

明治底辺社会のルポルタージュの歴史（それはか細いものであるが）を眺めてみると、ルポルタージュの淵源が日本近代のさけがたい不況期と重なりあっていることは否めない。底辺ルポルタージュの嚆矢的作品の一つとみなされている『地方惨状親察員報告』が、『報知新聞』紙上に森田思軒等の手によって連載されたのが明治一八（一八八五）年。それは明治一七、八年の全国的な不況に際して、その「惨状」をきびしく報告しているものであった。明治二三（一八九〇）年日本に第一回恐慌がおとずれたといわれる年には、桜田文吾の『貧天地饑寒窟探検記』が書かれるにいたっている。

ルポルタージュの淵源は直接は社会矛盾の存在そのものにおおきくかわっている。病巣が肥大化したときに、とくに。体制創造の強行者や資本蓄積の強行者には、そこにある社会矛盾は当然のものとし、か認知されない。矛盾そのものが批判的な意味では認知されない。そこからは当然ルポルタージュはうまれてこない。

明治のルポルタージュは奇しくも自由民権運動の系譜のなかからうまれている。——それは政教社なり、民友社から。あるいは改進黨系の『毎日新聞』等。一応権力に批判的な立場をとったもののなかからうまれてきている。日本近代の上昇期の大勢にのりながらも、一応明治政府のありかたを問う立場にたっていたことに由来する。自由民権運動——「政治小説」の星からは『地方惨状親察員報告』（明治一八年、森田文蔵・久松義典・加藤政之助）がでている。高島炭坑事件（明治二年）を明治政府につぎつけた政教社からは、事件のきつかけとなった『高島炭坑の惨状』（松岡好一、雑誌『日本人』、『高島炭坑々夫遭遇ノ実況』（吉本襄、同）等の現地告発ルポがうまれている。桜田文吾のルポルタージュ『天地饑寒窟探検記』（明治二三年）は政教社の『日本』新聞に掲載されたものであった。当時政教社（明治二〇年結成）は、鹿鳴館に象徴されるような明治政府の欧化政策に反対してナショナリズム（国粹主義）をかかげていたことは衆知である。政教社とは反対の立場をとって、平民主義、開明主義を主張していた民友社も、明治政府にたいしては進歩的な思想的野党の立場にたっていた。そういう民友社の『国民新聞』を背景にして、松原岩五郎の社会探訪が持続されたのであった。横山源之助も自由民権運動の一方の流れをくむ改進黨系の『毎日新聞』（島田三郎主宰）を主舞台にしながら、でてきている。さらに横山は民友社の『国民新聞』、『国民之友』に、明治三〇、三一年頃、『地方職人の現状』、『労働者の払底に就て』、『紡績工場の労働者』、『工業社会の一弊竇』、『世人の注意を逸する社会の一事実』、『蕉鹿』、『田舎の芝居』等のルポルタージュないしは社会時評を載せている。このように、明治ルポルタージュのめばしいものは、政教社、民友社等一応反権力者側の報道機関を背景にうまれている。

この期に発生したルポルタージュはおしなべて底辺社会を題材にしている。ルポルタージュの発生が